

憲法という人類社会の知恵

～ 日本の先人たちはどう受けとめてきたのか ～

講師 樋口 陽一さん(東京大学名誉教授)

1934年仙台市生まれ。日本学士院会員。専攻は憲法学。著書に『もういちど憲法を読む』『憲法と国家』『憲法という作為』(岩波書店)、『「日本国憲法」まっとうに議論するために』(みすず書房)、『個人と国家』(集英社)など多数。

正しいものに従うのは正しいことであり、最も強いものに従うのは必然のことである。

力のない正義は無力であり、正義のない力は圧政である。

力のない正義はただちに反対されてしまう。なぜなら悪い奴がつねにいるからである。正義のない力は非難されてしまう。したがって正義と力はいっしょにしておかなければならない。そのためには正しいものが強くなるか、強いものが正しくならなければならない。

正義は論議的になる。力は非常にはっきりしており、論議無用である。こういうわけで、これまで正義に力を与えることはできなかった。なぜなら力が正義に反論して、「正義など正しくはない、正しいのは自分だ」と言ったからである。

こうして人は、正しいものを強いものにすることができなかったのだ、強いものを正しいものとしたのである。

— パスカル『パンセ』より

とき：9月11日(土) 午後2時～4時

ところ：エルパーク仙台 ギャラリーホール

参加費：500円